

日本庭園史研究における建築と庭園の結びつきの視点

—森蘊による日本庭園通史を通して—

A perspective on the correlation between architecture and gardens in Japanese garden history research
: Through a historical overview of Osamu Mori's work on Japanese gardens

田 中 栄 治*

Eiji TANAKA

Abstract

In this paper, I consider a historical overview of Japanese gardens through the writings of Japanese garden researcher and gardener Osamu Mori from 1944 to 1960. Through interactions with architects and architectural history researchers, Mori had a unique perspective on the correlation between architecture and gardens in Japanese garden history research from an early stage of research. In the historical overview published in 1944, Mori referred to the practicality of Japanese gardens. In 1950, Mori considered “the practicality of architecture and gardens.” In 1957, he pointed out “the architectural design in the garden” and “the existence of partitions in the garden.” Furthermore, in 1960, he incorporated the perspective of the correlation between architecture and gardens in the historical overview of Japanese gardens. As a result, based on these studies by Mori, it was possible to clarify the formation process of the perspective of the correlation between architecture and gardens in Japanese garden history research.

キーワード：森蘊, 建築, 庭園, 結びつき, 日本庭園史

I はじめに —これまでの経緯—

日本庭園研究者で作庭家の森蘊（1905-1988）は、日本庭園史研究における建築と庭園の結びつきの視点をもって、生涯日本庭園の研究と作庭を行った^{注1}。筆者は、日本庭園の研究あるいは著書のある建築家である堀口捨己（1895-1984）・谷口吉郎（1904-1979）・西澤文隆（1915-1986）などについて調査・考察する中で、彼らの著書の中にならび森の名前が出てくことに気付いた。そこから、森と堀口・谷口・西澤の関係を調べ^{注2}、森と堀口・西澤の桂離宮意匠論から日本庭園史研究における建築と庭園の結びつきの視点について考察し^{注3}、森と谷口の修学院離宮意匠論から日本庭園の作者の意匠心を探る研究について明らかにし

*関西国際大学 現代社会学部

てきた¹³⁴。さらに、森の小堀遠州伝記からは、森と同時期に日本庭園史研究を行った重森三玲との比較を通して、森の日本庭園史研究における建築と庭園の結びつきの視点の独自性について考察を行ってきた¹³⁵。

なお、森については、これまでまとまった研究がほとんど行われていなかったが、近年になって、筆者の他に京都産業大学のマレス・エマニュエルにより、造園の視点から森の業績と日本庭園史の作成に関する研究が行われている。森の没後30年にあたる2018（平成30）年8月18日に行われたマレス・エマニュエル主催による森蘊研究会¹³⁶において筆者が口頭発表を行った際には、その後の総合討議において、森の日本庭園史研究における建築と庭園の結びつきの視点は、これまでの研究で取り上げられたことのない視点であり、今後特に森の作庭家としての業績の評価を行うに当たっての一つの軸になるのではないかという指摘を受けた¹³⁷。さらに、この研究会の報告書に収められた森の研究協力者であった村岡正の「森蘊先生の業績」という文章¹³⁸には、森の論文や著書などを「編年的に見てゆくと、森庭園史の体系をうかがうことができる」¹³⁹とし、森が戦後に著した数冊の日本庭園通史によって森は「森庭園史」を固めたとしている¹⁴⁰。ただし、村岡の文章では「森庭園史」がどのようなものであったか、同時期の日本庭園史研究と比較してどのような独自性を持っていたのかについての言及は行われていない。

これらのことから、本稿では森のこれまでの桂離宮意匠論、修学院離宮意匠論、小堀遠州伝記などの個別テーマごとの研究を考察することで得られた森の日本庭園史研究における建築と庭園の結びつきの視点が、森が著した日本庭園通史に関する著書の中にどのように取り入れられているのかを編年的に調査・考察することで、「森庭園史」の特に建築との関連についての一端を明らかにすることを目的とする。さらに、森の建築と庭園の結びつきの視点を明らかにすることは、今後の住宅の建築と庭園の設計のための知見を得ることに繋がると考えている。

II 森蘊における建築と庭園の結びつきの視点

森蘊による日本庭園通史をみる前に、森の日本庭園史研究における建築と庭園の結びつきの視点について改めて簡潔にまとめておく。森の特に桂離宮意匠論にみられる建築と庭園の結びつきの視点を整理すると、主に以下のものであった¹⁴¹。

- ・ 建築と庭園の実用性
- ・ 庭園における建築的意匠
- ・ 庭園における間仕切の存在

これらのうち、「建築と庭園の実用性」については、森は桂離宮の建築と庭園が観月や芸能及びスポーツなどの目的のために高い関連性を持って実用的に計画されているとしている。また、「庭園における建築的意匠」については、桂離宮の奥寄の前庭や書院建築周辺、松琴亭や笑意軒の茶亭周辺などに庭園の建築的な形態の取り扱いがみられるとし、森はそこから桂離宮の庭園の近代的で合理的な点を明らかにしている。さらに、「庭園における間仕切の存在」については、森は「庭園における建築的意匠」を発展させ、庭園の建築的な形態としての取扱いのみではなく、空間的な構成を取り上げて、庭園の部分を築山や樹木、方形の刈り込みなどで切り取られた屋外室とみる考え方を指摘している。これは、大正・昭和初期の生活改善運動における庭園改造の議論のなかで出てきた、庭園は建築と一体となった屋外の室という考え方を日本庭園研究に当てはめたものである¹⁴²。その上

で、森は「庭園における間仕切の存在」として、築山や樹木、刈り込みなどの物理的に空間を分ける間仕切だけではなく、飛び石の高さの違いによる、眺望を生かしながら人の意識の上で空間を分ける、観念的な間仕切の存在も指摘している³²。

これらのことから、次章以降、森の著した日本庭園通史を編年的に調査・考察することで、森が桂離宮研究を通して得たこれらの建築と庭園の結びつきの視点を、森庭園史にどのように取り入れているのかについて詳しく考察を行う。

Ⅲ 森蘊の日本庭園通史

1. 『日本庭園の伝統』（1944）と河原書店版『日本の庭園』（1950）

森によるはじめての日本庭園通史の著作は、戦時下の1944（昭和19）年3月10日に発行された『日本庭園の伝統』である（図1）。『日本庭園の伝統』について、森は戦時下という当時の日本の状況を受け、出版にあたって「此処に日本庭園の伝統を探ね、その本質を究め、日本庭園将来の発展に資し、且は日本精神文化宣揚の一翼となすも亦徒爾でないと思うものである」³³としている。『日本庭園の伝統』の中では、それぞれの時代の庭園やその意匠、作者等の記述の中に、以下のような建築と庭園の結びつきの視点を見ることができる。

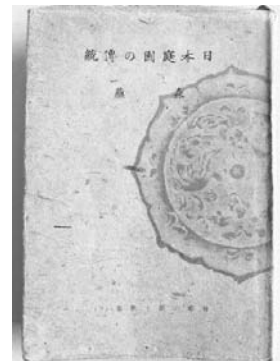


図1 森蘊『日本庭園の伝統』
一條書房 1944

平等院、浄瑠璃寺、毛越寺（円隆寺、観自在王院）及無量光院等は仏堂或はその前池の遺蹟から、当時の華麗なる建築と庭園との関連において一層の美観を発揮し得たものと推察せられるのである³⁴

庭園芸術の極致として激賞されて居る忘筌席の路地には彼の腕の限りをつくし、意匠と技術に一寸の隙もなき、傑出せる建築と庭園との関連構成が見られ、それらの造型芸術の中には彼の人格の豊かな香りが今猶馥郁として居る³⁵

森は、1929（昭和4）年に東京大学農学部農学科入学後、まもなく受講した田村剛の講義に強く引かれて日本庭園を学ぶようになったが、その後日本庭園を学ぶ上で建築の知識の必要性を感じ、1931（昭和6）年からは田村を通して東京大学工学部建築学科の授業の聴講をはじめている。また、その頃から森は東京工業大学の前田松韻の研究室に出入りして指導を受けるようになる。さらに、1932（昭和7）年に日本建築学会に、1938（昭和13）年には建築史研究会に入会し、当時の森の論文の多くが建築系の研究誌に発表されている³⁶。これらのことから、『日本庭園の伝統』が発行された1944（昭和19）年には、森はすでに建築と庭園の結びつきの視点を持っていたと考えられる。

ただし、『日本庭園の伝統』においては、建築と庭園の結びつきの視点のまとまった記述は見られないことから、森の中でも建築と庭園の結びつきの視点については、まだ深く考察できていなかったと考えられる。その一方で、『日本庭園の伝統』では、建築と庭園の結びつきの視点と合わせて、伝統的な日本庭園の実用性に関する記述も多く見られる。

庭園の源流に於ける実用性こそは、日本庭園を一貫せる伝統であって、爾来各時代により各種各様の発展を示す様になったものである⁵⁾

日本庭園はその源流に於いて演練及び生産両方面の実用が著しく加味されたものであった事は前にも述べて置いた通りであるが、中古以降も猶庭園は屋外の演練及び風流生活の場所としてその機能の上に強い実用性が要求されて居た事は勿論である⁶⁾

茶庭は一見純粋に鑑賞本位の如くに見えるが、実は従来の庭園の歩けない道、渡れない橋、洗えない水鉢の如きは全く排除され、茶庭内にあるもの之総て実用性を帯びたものであって、飛石敷石は雨中雨後に履物を濡らさぬ用意であり、手水鉢は手や口をすすぐ目的を持ち、夜分足下を照らす為に夜燈が使用されるといった実用本位のものである⁷⁾

森は、日本庭園はけっして鑑賞本位のみにつくられたものではなく、そこに「実用と美とを兼ね備うる日本庭園の伝統の精神」⁸⁾を見ている。これは、大正時代から昭和初期に行われた生活改善運動において、1919(大正8)年に出版された田村剛の『実用主義の庭園』をはじめとする庭園改造の主張の中で、近代的な日本の家庭生活のための「戸外室」としての実用本位・家族本位の庭の実現が求められ、その一方で伝統的な日本庭園が鑑賞本位につくられているとする批判に対して、伝統的な日本庭園の実用性についての森の主張として捉えることができる。これらのことから、森の伝統的な日本庭園に建築と庭園の結びつきを見出す主張の基礎には、この「実用と美を兼ね備える日本庭園の伝統の精神」という考え方があり、それが後の「建築と庭園の実用性」という日本庭園史研究における建築と庭園の結びつきの視点へとつながっていったことがわかる。

『日本庭園の伝統』から6年、終戦後の1950(昭和25)年10月10日に河原書店から発行された森の著書『日本の庭園』(図2 以下、河原書店版『日本の庭園』とする)について、森は巻頭の緒において発行の目的を「読者一人残らずに、日本庭園の本質を理解していただき、貴重な文化財として、その保護に多大の関心を持たれ、その活用によって観光立国に御協力が願いたいと念願したからに外ならない」⁹⁾としている。また、巻末の「復刊の言葉」によると河原書店版『日本の庭園』は1944(昭和19)年に発行された『日本庭園の伝統』の復刊であり、森が「終戦後、南方から復員して来た筆者が、暫く外地にあって多少日本の自然観について考え方が変わったことと、日本美術殊に庭園観に対する多少の独善的態度を認めた上で、この際率直に手を加え、書き改めた箇所もある」¹⁰⁾としており、第二次世界大戦の終戦後に森の持っていた日本の自然観や庭園観に多少の変化があったとしている。

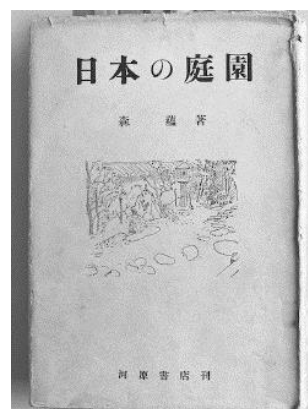


図2 森 荘 『日本の庭園』 河原書店 1950

河原書店版『日本の庭園』は、従来の庭園史の文献が様式の時代的変遷や特定の庭園の創造や沿革、作者などの記述が多いのに対して、特に日本庭園独特の形態、意匠、技術家の活動などの推移、発達について詳しく説明したものであるとしており、全体の構成としては『日本庭園の伝統』から大きくは変わっておらず、「実用と美を兼ね備える日本庭園の伝統の精神」を基礎とする森の考え方も大きくは変わっていない。その上で、主に以下の点で『日本庭園の伝統』と河原書店版『日本の庭園』との違いが見られる。

- ・日本庭園様式の変遷が縄文時代の原始庭園からはじめられている。
- ・洛中洛外屏風の研究が取り入れられている。
- ・特権階級のみではなく近世以降の一般庶民の庭園の記述が見られる。
- ・現代の庭園として国際建築運動の影響を受けた住宅の庭園の記述が見られる。
- ・新発見の庭園秘伝書の記述が見られる。

これらのうち、日本庭園様式の変遷が縄文時代の原始庭園からはじめられていることや、洛中洛外屏風の研究や新発見の庭園秘伝書についての記述は、『日本庭園の伝統』執筆後の新しい研究成果を取り入れたものであるが、ここで重要なのは、特に洛中洛外屏風の研究や新発見の庭園秘伝書については、建築家 堀口捨己の研究による成果を挙げている点である(図3)。堀口は伝統的な茶室・茶庭の研究から、日本庭園の研究を通して建築と



図3 東山殿復元図

庭園の空間構成の研究を行った建築家であり、1938(昭和13)年に堀口が日本庭園協会の理事に就任した際、森は評議員のひとりであった。また、1940(昭和15)年に発行された横井時冬の『日本庭園発達史』において、堀口と森は校註を一緒に担当していた。堀口は、1943(昭和18)年に「洛中洛外屏風の建築的研究」を発表³⁴しており、この堀口の研究から刺激を受けて、森も洛中洛外屏風の復元的研究を行っている³⁵。さらに、森は1981(昭和56)年に発行された著書『日本庭園史話』の中で「日本庭園史学をはじめた人たち」に続いて堀口の名前を挙げている³⁶。この時期に、森が堀口の特に建築と庭園の空間構成の研究から受けた影響は、森が日本庭園史研究における建築と庭園の結びつきの視点を形成する上で重要な役割を持つことになったと考えられる。

また、河原書店版『日本の庭園』において、森は日本庭園史研究の対象を特権階級から一般庶民の庭園に広げている³⁷。これは、終戦後の日本における市民のための近代化された住生活の問題に関連してのことと考えられ、森の庭園観の変化した部分とみることができる。さらに森は、現代の庭園として鉄筋コンクリート造の住宅、特に国際建築運動の影響を受けた住宅における庭園を取り上げているが、その実例として堀口の設計した住宅に注目している(図4)。

欧州におこった国際建築運動の影響を受けた若い人達は日本の気候風土に合致した材料によって機能第一主義をとなえるなど、庭園の機能を含めて大いに都市建築の新しい行き方を主張し又実行にうつしはじめた¹¹⁾

さらに森は、昭和初期に起きた新しい住宅問題による「住宅合理化の運動及び国際建築の新しい運動の上に立脚した、新庭園運動が起りかけた」¹²⁾としている。ただし、これは戦争により中断を余儀なくされ、終戦後に新たな民主化された生活にふさわしい庭園が求められるようになる。

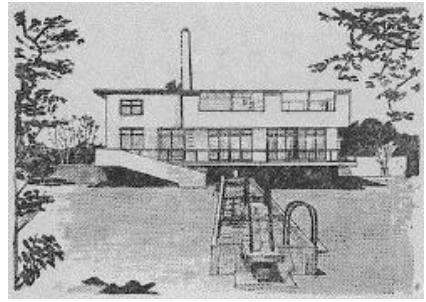


図4 若狭邸 設計：堀口捨己

住居は新憲法の精神に沿って生れた新しい家族制度のもとにあらねばならない。庭園も又民主化された住生活を反映したものでなければならぬ。二重生活が清算された暁の住生活が洋式化し、庭園もまた畳座敷から坐って眺める態のものから、居室の延長として家族本位に利用される戸外室たるにふさわしいものとならねばならない。その場合テレース又は芝生は欠くべからざるものとなる¹³⁾

ここで、森の日本庭園史研究が単に過去の伝統的な日本庭園を振り返るだけのものではなく、将来の近代化された日本の住生活にふさわしい庭園はどうあるべきかという視点を持っていることがわかる。そこには、森の日本庭園史研究に「つくる」という視点を見ることができる。『日本庭園史話』の中で森が堀口を「日本庭園史学をはじめた人たち」に続けて取り上げた際に、森は堀口の日本庭園史研究について、特に創作者としての視点を高く評価している¹⁴⁾。そして、住宅の庭園を居室の延長として家族本位に利用される戸外室として捉える点に、森の「建築と庭園の実用性」としての建築と庭園の結びつきの視点が含まれている。

ここでは、『日本庭園の伝統』及びその復刊である河原書店版『日本の庭園』において、森の日本庭園史研究における建築と庭園の結びつきの視点は、まだまとまった記述としては見られないが、森の日本庭園史研究の基礎である実用性の視点、特に「実用と美を兼ね備える日本庭園の伝統の精神」という視点を見ることができた。さらに、森の日本庭園史研究が単に過去の伝統的な日本庭園を振り返るだけではなく、将来の日本庭園を「つくる」という視点を見ることができ、そこに「建築と庭園の実用性」としての建築と庭園の結びつきの視点が含まれていることがわかった。そして、そこには建築家 堀口による日本庭園を通した建築と庭園の空間構成の研究、および庭園設計の影響があったことがわかった。

2. 『美しい庭園－鑑賞と造庭－』（1950）と創元社版『日本の庭園』（1957）

河原書店版『日本の庭園』が発行された5日後、1950（昭和25）年10月15日に創元社から発行された森の著書『美しい庭園－鑑賞と造庭－』（図5）について、森は巻頭のはじめの言葉において発行の目的を「この新しい時

代の要求に応じて過去に於ける日本庭園の真価を国民に認識してもらい、又世界の観光客にも理解してもらおうとするため」¹⁴⁾としており、そのために森はこの本を従来の日本庭園の様式史的な時代別や名園の序列とするのを避け、「一般の庭園鑑賞眼を高め、且つ又国民一般の日常生活の場所としての、環境整備への関心を強めていただくために、敢て本書を著した」¹⁵⁾とし、またそれだけにとどまらず、高尚な趣味であり、健康的な住生活のための庭いじりの利用面や技術面についての考察も充分に取り入れるように試みたとしている。さらに、森は『美しい庭園―鑑賞と造庭―』について以下のように記している。



図5 森 蘊 『美しい庭園―鑑賞と造庭―』 創元社 1950

庭園は建築と密接不可分の関係にあるものであって、これまでの建築と切りはなして説かれて来た庭園書には、いささか物足りなく思われる点があるので、住生活の面との接しよくという点を考え、建築と共に利用し、建築と併せて鑑賞するという態度を出来るだけ取入れて見たのである¹⁶⁾

ここに、森の日本庭園通史に関する著作の中では、日本庭園史研究における建築と庭園の結びつきの視点について、初めてまとまった記述が著されたことになる。河原書店版『日本の庭園』と『美しい庭園―鑑賞と造庭―』は、ほぼ同時に発行されたものであるが、河原書店版『日本の庭園』が『日本庭園の伝統』の復刊という位置付けであるのに対して、『美しい庭園―鑑賞と造庭―』は新たに著されたものであり、そこには当時の森の日本庭園史研究に対する姿勢がより明確に表現できたと考えられる。このことは、『美しい庭園―鑑賞と造庭―』の全体の構成の中に「8. 日本庭園と住宅建築との関係」という章が設定されているところに現れている。

まずは、建築と庭園の結びつきの視点の前に、先に見た日本庭園における実用性について見ることにする。

あらゆる階級を通じての庭園の存続性は、この実用と美の両立にあるのだと思う。即ち庭園の鑑賞にあたっては、庭園に於ける実用性と芸術性の両立を理解することが、最も大切なことである¹⁷⁾

その後森は、日本庭園と西洋庭園とを比較することにより、芸術性という視点から見たときの日本庭園の様式的特徴を象徴的自然風景式庭園であり、その中に自然延長の風景式庭園を併せ持っているとしている。その上で、森は「8. 日本庭園と住宅建築との関係」の章でも、最初に庭園の実用と美観という視点から考察している。まず、森は庭園を実用の視点から見るときに2つの分類ができるとしている。

その一つは住生活即ち建築との関係から、住居の内部に於けると同様に、戸外に於ける住生活の場所即ち戸外室として見た場合であり、他の一つは生産又は演技行事などの面から見た場合である〔…中略…〕庭園は住生活の場所として、戸外室とも呼ばれるに相応しく、休養、運動、鑑賞など精神的、肉体的の厚生を行う場所として、明瞭な目的のもとに独立した地域を区画されたものでなければならぬ¹⁸⁾

森は、これら2つに分類できる庭園の実用性のうち、現代の都市住宅の庭園としては生産又は演技行事などの面の実用性よりも、庭園の住生活の場所としての実用性の面が重要であるとしている。これらのことから、森は『美しい庭園 鑑賞と造庭』においても『日本庭園の伝統』や河原書店版『日本の庭園』と同様に、日本庭園史研究の基礎としての日本庭園における実用性の視点を持っており、大正・昭和初期の生活改善運動を反映した「戸外室」という言葉についても共通して用いていることがわかった。

その上で、森は伝統的な日本庭園と住宅建築との関係について考察している。まずは飛鳥奈良時代の庭園と住宅建築について以下のように記している。

当時の住宅建築と庭園との関係について、更に確かな史料を読者の前に提供することが出来る。その一つは先にのべた法隆寺東院に於ける遺蹟であり、他は直接庭園の姿を伝えるものではないが、法隆寺伝法堂の解体修理のときに浅野清氏によって明らかにされた前身建物の構造から分る、庭園と建築との関係並にその利用状況などである¹⁹⁾

また、森は平安時代の貴族の住まいである寝殿造の庭園と住宅建築についても言及している(図6)。まず、寝殿造の庭園は寝殿の南庇あたりからの遠望を考慮して種々の工夫がなされている点を指摘し、また寝殿造庭園の庭園建築である釣殿からの視点に着目している。

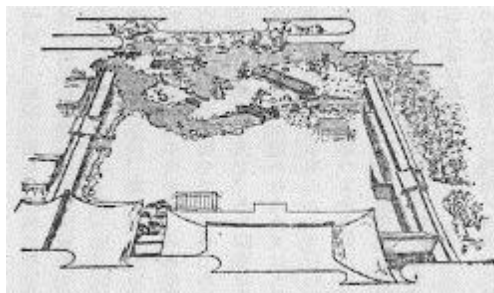


図6 寝殿造の庭園

当時の庭園の鑑賞を建築との関係から調べると、前栽秘抄にも明らかに寝殿の南庇あたりを根本にすることを述べて居る

〔…中略…〕寝殿造庭園の要素である池面も、中島にかけられた橋も、遣水の流れや岸に立てられた石も、池の対岸に築かれる山も、そこに落される滝も、谷の向きも、それらはすべて寝殿からの遠望を考慮してそこには遠近法が加味されて居り、なるべく地積を広く、又奥深く感じさせる様にと中断性遠近法又は、斜視的遠近法など種々の苦心が払われている²⁰⁾

一方には釣殿を池に臨み、中島によせかけて建て、廊又は渡殿にかこまれた箇所には泉をうがち、寝殿と東対との間の透渡殿の床下や、東対又は東中門廊に接して遣水を流すなど、庭園の細部をも建築の内部から鑑賞させ、又これらの庭園的取扱によって建築を一層美化するなど、建築と庭園とは相より相まって、環境と生活の美化に大いに役立って居るのである²¹⁾

次に、書院造の庭園と住宅建築については、森は「足利義政の建てた東山殿や、管領細川高国の住居などの配置や間取りは、堀口捨己博士の研究によってはっきり分かって来て居る」²²⁾ とし、森も細川管領邸の庭園と住宅建築について洛中洛外屏風をもとに考察している(図7)。ここでも、ほぼ同時に発行された河原書店版『日本の庭園』と同様に、建築家 堀口による洛中洛外屏風の建築的研究の成果が取り入れられている。

建物の配置は段形後退りに並んで居て、それは後の書院造に好んで用いられた配置である。[…中略…] 庭園は池がありその汀は出入りが多く、細長い岬が向い合いに突出して居てそれに唐破風の付いた亭橋がかかっている。[…中略…] 池の西側にある座敷、即ち西座敷は泉殿であるが、別に構造的に、池に臨んでいるわけではない。そこでは、月明の夜の夕涼みなどが行われていた²⁰⁾

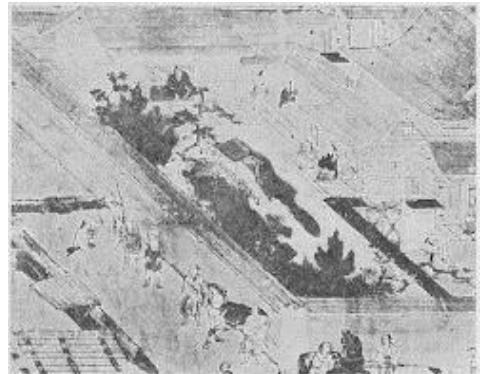


図7 書院造の庭園

数寄屋造の庭園と住宅建築については、茶庭と茶室建築および桂離宮などについての記述が見られる。特に茶庭と茶室建築については、書院造の庭園と住宅建築と同様に、堀口による研究成果が取り入れられている。

茶屋（数寄屋、茶室を含む）は唯茶を喫する為の建築であるばかりでなく、茶につながるのあるすべての用意即ち茶屋に到達する路地も、茶屋をして他の俗世界から切離す為の環境の取扱もすべてを含んだものである。この茶屋から茶室建築を除き去ったものが私の名付けようとする茶庭である。／堀口捨己博士によると、茶庭の源は前栽秘抄にもある、滝川の水を添えた崖造りとする事により、歌などに詠まれる山住みの侘しさを表わすために、建物や前栽や遣水などの取合いを行うことから端を発したとされている²¹⁾

数寄屋建築そのものとしても、庭園との関係に於ても断然頭角を抜ん出ているものは、桂離宮であろう。[…中略…] 桂離宮は単なる数寄屋建築と庭園の集成ではなく、この中心をなす池面をかこんだ空間にくりひろげられた、実はつぎはぎだらけの一幅の絵巻であり、しかもそこには旧套の大和絵風のものから、図案化された幾何学的模様に至るまで極端な意匠上の対立が認められ乍らも、今日近代人の鑑賞に際してそれほどの奇異の感じを与えない²²⁾

ここで、森は桂離宮について、特に中書院から新書院に沿って設けられた雨落溝と、その縁石による縁下の叩きと庭園の芝生又は苔蒸す地表との泰然と区切るあたりについて、その建築から庭園への推移を「従来の日本建築や庭園の技術をはるかに超越した芸術と生活の接近を感じ、そこに『近代』を発見する事が出来るのである」²³⁾と高く評価している。これについては、建築史家の藤島玄次郎が1945（昭和20）年に発行した『桂離宮』が影響していると考えられる。『桂離宮』の中で藤島は、桂離宮の庭園が極めて建築的であるとしている²⁴⁾。そして、森は藤島の『桂離宮』を通じ啓発されるところがあったとし²⁵⁾、『美しい庭園－鑑賞と造庭－』の発行から約1年後の1951（昭和26）年に、森はそれまでの研究をまとめて『桂離宮』を発行した。

ここまで、『美しい庭園－鑑賞と造庭－』において、森は各時代の伝統的な日本庭園と住宅建築との関係についての考察を行っており、そこには日本庭園に見られる住生活の場所としての実用性を基礎として、建築と庭園の

結びつきの視点のうちの主に「建築と庭園の実用性」を森が平成していったことがわかる。また、そこに建築家の堀口や建築史家の藤島などの影響があることもわかった。

さらに、森の考察は伝統的な日本庭園のみではなく、現代住宅と庭園の関係にも及んでいる。

日本の近代住宅建築は個人住宅の方面にも集合住宅の分野にも見るべき発足を促したのであった。こうした新しい傾向の住宅建築に伴う庭園は、所謂機能本位のもので、所謂住宅建築の延長として、戸外室として取扱われたものである²⁷⁾

森は、明治以降、特に大正期から昭和初期に西洋の影響を受け近代化する日本の住宅と庭園についても、堀口の設計した住宅と庭園の写真を掲載して、建築と庭園の結びつきの視点をもって考察している(図8)。さらに、『美しい庭園—鑑賞と造庭—』の中の、「9. 日本庭園の作者」および「12. これからの日本庭園」においても、同様に堀口あるいは建築家 谷口吉郎の設計した住宅と庭園の写真を掲載し、将来の日本の住宅の建築と庭園についての考察を行っている(図9)。そこには、『日本庭園の伝統』及び河原書店版『日本の庭園』と同様に、森の日本庭園研究における将来の日本庭園を「つくる」視点を見ることができる。



図8 吉川邸 設計: 堀口捨己

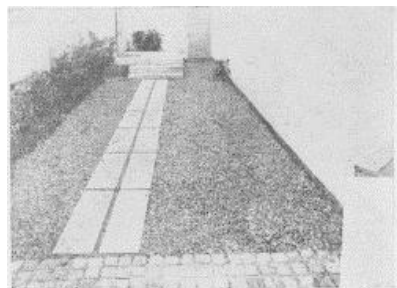


図9 K氏邸 設計: 谷口吉郎

『美しい庭園—鑑賞と造庭—』から約7年、1957(昭和32)年6月15日に創元社から発行された森の著書『日本の庭園』(図10 以下、創元社版『日本の庭園』とする)について、森は巻頭のはじめの言葉において、まず既刊の『日本庭園の伝統』(のち河原書店版『日本の庭園』として復刊)と『美しい庭園—鑑賞と造庭—』について、「これら既刊の二冊の書物は、共に日本庭園発達史の線に添いながら、日本庭園の特色や、意匠や、技術の解説を行い、内外の観光者にとっては日本庭園鑑賞の手引書ともなるように纏めて見たものであった」²⁸⁾とし、特に『美しい庭園—鑑賞と造庭—』では「これからの庭園」についての考えを述べたとした上で、創元社版『日本の庭園』について「本書は『美しい庭園』の改版に近いもので、読者の要望にこたえて、努めて写真を豊富に取り揃え」²⁹⁾たものであるとしている。また、創元社版『日本の庭園』のあとがきにおいて、森は「私の庭園史研究は、歴史のための歴史研究であるより、これか



図10 森 著『日本の庭園』創元社 1957

らの庭園意匠のありかたを考える参考資料の収集と、整理の役目だと思っている」³⁰⁾とし、森の日本庭園史研究が将来の日本庭園を「つくる」視点を持って書かれたことを示している³¹⁾。

なお、この間に森は、1950（昭和25）年に東京工業大学教授で建築家の谷口吉郎の研究協力者として文部省の科学研究費を受けて桂離宮の研究を進め、その成果は1951（昭和26）年に創元社から発行された『桂離宮』（以下、創元社版『桂離宮』とする）にまとめた。また、森は1952（昭和27）年に奈良国立文化財研究所に着任することにより関西に生活拠点を移すことで桂離宮の研究をさらに進め、1953（昭和28）年には東京工業大学に学位請求論文『桂離宮の研究』を提出し博士号を授与されている。学位請求論文『桂離宮の研究』は、一部構成を変更し加筆して1955（昭和30）年に東都文化出版から『桂離宮』として発行された。さらに、1956（昭和31）年には、新たな発見や現地での詳細な調査から創元社版『桂離宮』の論旨補強を行い、創元社から『新版 桂離宮』が発行されている。これらの桂離宮意匠論の中で、森は本稿の最初に見た「建築と庭園の実用性」「庭園における建築的意匠」「庭園における間仕切の存在」の建築と庭園の結びつきの視点を形成していった。つまり、創元社版

『日本の庭園』は、森の日本庭園史研究における建築と庭園の結びつきの視点がある程度形成された段階で発行されたことになる。

森は創元社版『日本の庭園』は『美しい庭園—鑑賞と造庭—』の改版としているが、創元社版『日本の庭園』の全体の構成を見てみると、『美しい庭園—鑑賞と造庭—』の「8. 日本庭園と住宅建築との関係」にあたる章はなくなっているが、ここでは日本庭園史研究における建築と庭園の結びつきの視点は、創元社版『日本の庭園』においてははじめの言葉に書かれていた、巻頭に豊富に取り揃えた写真とその解説、および巻末に掲載された建築と庭園がともに描かれた実測図により表されるようになったと考えられる

（図11、図12）。ここで、森が建築と庭園の状況を、それまでの本文の中に写真を挿入するのではなく、巻頭にまとめた写真とその解説で表現するようになったのは、『修学院離宮』（1955）や『新版 桂離宮』（1956）からであり、これには堀口の著書『桂離宮』（1952）が影響していると考えられる³²⁾。

その一方で、創元社版『日本の庭園』には日本庭園の特色の章に「日本における建築式庭園」の節が設けられており、桂離宮の建築と庭園が取り上げられている。

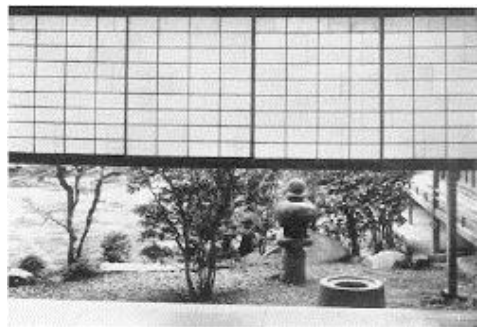


図11 弧箒庵庭園露地 写真

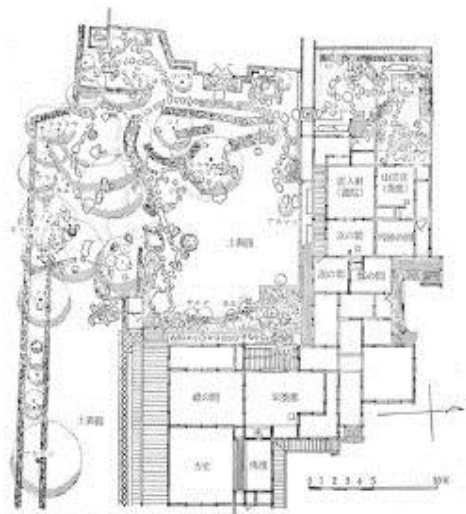


図12 弧箒庵 実測図

近世初期において、外観は一見自然風景式でありながら、その細部とその精神において、日本独特の建築式庭園を採用して一新世紀を画したものがあつた。その名は桂離宮である。[…中略…] そこでは建築は書院も茶屋もともに庭園に完全に融和しているし、庭園は建築の内側（底の下方）にまで突入している。庭園で使用されている自然素材（樹木、敷石、飛石その他）は、ほとんどすべてに人工が施されており、それらの材料の取扱い方においてもまた実に建築的である³¹⁾

池辺の飛石道の周辺にいたつて、よく観察して見ると、ある境界線によつて、区切られた一つ一つの空間として、すなわち屋根のない座敷や、屋外にある縁側のついた小室のような独立性をもっているのである³²⁾

ここで示されているのは、森の日本庭園史研究における建築と庭園の結びつきの視点のうち、「庭園における建築的意匠」および「庭園における間仕切の存在」に当たるものであり、「建築と庭園の実用性」については主に写真の解説に記されている。それは、「建築と庭園の実用性」に関する建築と庭園の結びつきの視点が森にとっては特別なことではなく、森の庭園論の中に充分に取り入れられたと見ることができる。

一方で、創元社版『日本の庭園』においても、「現代の庭園とこれからの庭園」として、将来の日本庭園を「つくる」視点が見られる。

これからの庭園意匠として私は次の三つの考え方以外にないような気がする。第一は徹底した実用主義、すなわち装飾にあらずる建築式に生きること、第二は純粋に近い自然主義にかえること、つまり作庭記以前にさかのぼること、第三には抽象的構成の新しいあり方の考案である³³⁾

森は、第一としては桂離宮の建築物の周辺の取り扱い、第二としては修学院離宮の上御茶屋と大和慈光院の地形や背景の巧妙な利用法、第三としては西芳寺の枯山水石組をそれぞれの参考として挙げ、その精神を尊重すべきであるとしている。ここには、伝統的な日本庭園の意匠と精神を、これからの庭園意匠のありかたを考える参考資料として整理する、森の日本庭園史研究の役割を見ることができる。

3. 『日本の庭』（1960）

1960（昭和35）年6月1日に朝日新聞社から発行された『日本の庭』（図13）について、森は巻頭のはじめの言葉において発行の目的を「できることなら、これから庭を作ろうとする人に役立つ本にしたいと思つた」³⁴⁾としている。そのために、森は以下のように考えている。

私は従来の書き方とちがつた、作者・流派・作風というような側から見た解説を主眼とした。[…中略…] 日本の庭の精神を本当に理解し、日本の造庭技術を後世に伝え、これからの日本の新しい庭の方向を見極める手段でもあろうかと考えた³⁵⁾



図13 森 恒 『日本の庭』 朝日新聞社 1960

ここに、森が日本庭園史研究に一貫して持ち続けた「つくる」視点が見られる。また、「4 建築との相互関係」において、森は実測図に時間をかけて現存建築の配置や間取りを実測し、建築と庭園の相互関係を図示したとしている。

庭園の美は建築と共にあるという私の三十年来変わらぬ信念から、庭の作風を知るには、庭の利用上の拠点となるべき建築に関連して、その観賞の場所または地点を明瞭にしたり、景観の一要素として、見且つ見られる位置にある両者の相互関係を、より詳細に究めようと努めたことである³⁶⁾

森は、日本庭園史研究において徹底的な文献調査と共に、現地の実測調査を重要視したが、そこには建築と庭園を一体的に捉えようという強い意志が込められている。

しかし従来の建築関係の実測図だと建築の部分は正確でも、環境の部分が軽視され勝ちであったし、庭園関係の実測図だと、建築の方が見取図的に杜撰であったというように、共に不完全であったことに対する私の気持の上での不満が、私をこの種の仕事に没頭させ、このような実測図作製の面倒な仕事にかり立てる動機となったのである³⁷⁾

それまでの森の日本庭園通史と『日本の庭』の異なる点は、日本庭園史研究における建築と庭園の結びつきの視点を、『美しい庭園—鑑賞と造庭—』や創元社版『日本の庭園』のように章や節を分けて単独のテーマとして取り上げるのではなく、日本庭園通史の考察の中に完全に取り入れている点である。森は、平安時代後期の寝殿造の建築と庭園は「次第に中国風のものから脱却して完全に日本的な建築と庭園の意匠と、その結びつきに定着した」³⁸⁾とし、室町時代の多くの大庭園は「以前の地形に住宅建築または庭園建築を新設したもので、池畔や山腹の石組が補われることにより面目一新したもの」³⁹⁾、桃山時代の光浄院の初期書院造の建築と庭園は「建物と庭園の調和に苦心のあとを示している」⁴⁰⁾、江戸時代前期の茶庭は「露壇または戸外室にもたとえられる空間構成の新しい試みは、[…中略…] 建築的な道具立ての配列」⁴¹⁾、同じく江戸時代前期の桂離宮の建築と庭園は「建築的空間と、庭園的空間とが、親密性をもってきた」⁴²⁾とし、通史の中でそれぞれの時代の日本庭園を建築と庭園の結びつきの視点から考察していることがわかる。また、『日本の庭』では全ての写真を新たに撮影し直し、それらの解説文と建築を含めた実測図により森の日本庭園史における建築と庭園の結びつきの視点を表現している点は、創元社版『日本の庭園』で見られた手法をより徹底している(図14)。さらに、森は『日本の庭』において昭和初期の近代的な庭園の作者について以下のように記述している。

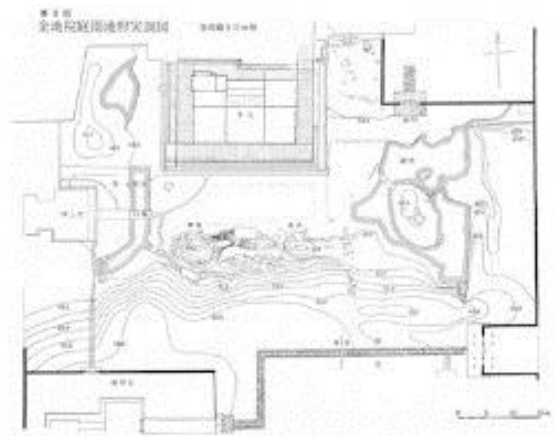


図14 金地院庭園地形実測図

昭和十年頃から後、殊に終戦後の庭園界の特色として、農林関係の出身者よりは建築家出身の設計家の進出が目立っている。著者の寡聞にもよろうが、堀口捨己博士・谷口吉郎博士・吉田五十八博士・坂倉準三氏などの作品は、建築と同様に高い評価を得ているし、もっと元気のいい所では、丹下健三氏や清家清氏の建築が定評あると同時に、その余技とも思える庭園設計の巧妙さに、思わず庭園専門家達も反省させられるものがある⁴³⁾

ここで、森は建築家による庭園設計を高く評価している。その上で、森は現代の庭園の問題は建築家だけで解決できるものではないとし、変化しつつある生活や建築に対して、庭園はやはり庭園家によって向上することを望んでいる。ここにも、森の日本庭園史研究における「つくる」視点を見ることができる。これは、建築と庭園の結びつきの視点を持って、生涯日本庭園の研究と作庭を行った森独自の視点であると考えられる。

Ⅳ おわりに

本稿では、森の日本庭園通史についての著作を編年的に見ることを通して、森の日本庭園史研究における建築と庭園の結びつきの視点の変化について考察を行った。

森によるはじめての日本庭園通史の著作である『日本庭園の伝統』（1944）では、日本庭園史研究における建築と庭園の結びつきの視点はまだまとまった記述とはなっていなかったが、森の日本庭園史研究の基礎となる日本庭園の実用性、特に「実用と美を兼ね備える日本庭園の伝統の精神」の考え方があることがわかった。さらに、『日本庭園の伝統』とその復刊である河原書店版『日本の庭園』（1950）を比較することにより、森の日本庭園史研究に「つくる」という視点を見ることができ、そこに建築家 堀口捨己の影響があることがわかった。

河原書店版『日本の庭園』とほぼ同時に発行された『美しい庭園―鑑賞と造庭―』（1950）では、森の日本庭園通史についての著作の中では、初めて日本庭園史研究における建築と庭園の結びつきの視点についてのまとまった記述が著されていた。森は各時代の伝統的な日本庭園と住宅建築との関係についての考察を行っており、そこには日本庭園に見られる住生活の場所としての実用性を基礎として、建築と庭園の結びつきの視点のうちの主に「建築と庭園の実用性」の視点についての考察が行われていた。また、そこに建築家の堀口や建築史家の藤島などの影響があることがわかった。

森が『美しい庭園―鑑賞と造庭―』の改版と位置付けている創元社版『日本の庭園』（1957）では、「建築と庭園の実用性」の視点は日本庭園通史の中に取り入れられ、主に巻頭にまとめた写真とその解説および実測図で表現されるようになった。そこには、堀口の著書の影響が見られた。その上で、森は創元社版『日本の庭園』では建築と庭園の結びつきの視点のうちの主に「庭園における建築的意匠」および「庭園における間仕切の存在」について指摘していた。

森は『日本の庭』（1960）において、それまでに得られた建築と庭園の結びつきの視点を、単独のテーマとして取り上げるのではなく、日本庭園通史の考察の中に完全に取り入れていることがわかった。さらに、森は『日本の庭』においても近代以降の新しい住宅の建築と庭園についての考察を行っており、特に建築家による庭園設計を高く評価し、その上で庭園家による庭園の向上を望んでいる。ここにも日本庭園史研究における「つくる」視点を見ることができ、それは建築と庭園の結びつきの視点を持って、生涯日本庭園の研究と作庭を行った森独自の視点であると考えられる。

これらのことから、本稿では、森の日本庭園史研究における建築と庭園の結びつきの視点の形成の過程を明らかにすることができ、「森庭園史」の特に建築との関連についての一端を明らかにできたと考えている。

【注】

- 注1 森蘊「建築と庭園の結びつきを求めて」『建築雑誌』vol. 98 No. 1211 1983(昭和58)年9月号, 20頁, 1983 による。この文章は森が日本建築学会に入会して50年目に終身会員となった際に発表されたものである。
- 注2 田中栄治「住宅における建築と庭園 一庭園研究者・造園家 森蘊と建築家 堀口捨己・西澤文隆一」『神戸山手大学紀要』第17号, 9-40頁, 2015, および田中栄治「庭園研究者・造園家 森蘊と建築家 谷口吉郎 一昭和前半期における建築家と造園家の交流一」『神戸山手大学紀要』第18号, 59-87頁, 2016 において詳しく考察している。
- 注3 田中栄治「建築と庭園の結びつきの視点 一森蘊と堀口捨己・西澤文隆の桂離宮意匠論一」『神戸山手大学紀要』第19号, 69-104頁, 2017 において詳しく考察している。
- 注4 田中栄治「建築と庭園における意匠心 一森蘊と谷口吉郎の修学院離宮意匠論一」『神戸山手大学紀要』第20号, 47-73頁, 2018 において詳しく考察している。
- 注5 田中栄治「森蘊における建築と庭園の結びつきの視点 一小堀遠州の伝記を通して一」『神戸山手大学紀要』第21号, 27-43頁, 2019 において詳しく考察している。
- 注6 2018(平成30)年8月18日(日)に奈良の森蘊旧宅(現 森蘊庭園研究所)において行われた。主催者は当時奈良国立文化財研究所のマレス・エマニュエル(現 京都産業大学), 参加者は森有史, 飛田範夫, 牧岡一生, 仲隆裕, 田中栄治, 栗野隆, 高橋知奈津, マレス・エマニュエルであり, 森蘊に関する研究会としては初めて開催されたものである。
- 注7 マレス・エマニュエル編, 森有史, 栗野隆, 飛田範夫, 高橋知奈津, 田中栄治, マレス・エマニュエル著『森蘊研究成果報告書 昭和の作庭記 一森蘊の業績と日本庭園史の作成』綴水社, 131-132 頁, 2020 に記載がある。なお, この報告書は森蘊に関する研究がまとめられた初めてのものである。
- 注8 マレス・エマニュエル編, 同上, ii-vi 頁, 2020 に収録されている。この文章の初出は, 『古代文化』第41 巻 第10 号, 財団法人古代学協会, 58-60 頁, 1989 である。
- 注9 マレス・エマニュエル編, 同上, v 頁, 2020 に記載がある。
- 注10 田中栄治, 前掲書, 2017 において詳しく考察している。
- 注11 田中栄治「大正後期から昭和初期の関西の住宅における庭園の役割 一阪神間のモダニズム住宅 その5一」『神戸山手大学紀要』第14 号, 33-55 頁, 2012 において詳しく考察している。
- 注12 田中栄治, 前掲書, 2017 において詳しく考察している。
- 注13 森蘊門下生一同『故森蘊先生著述作品目録(稿)』自家版, 1989 による。また, マレス・エマニュエル編, 前掲書, 220-234 頁, 2020 にも詳しい年表にまとめられている。
- 注14 堀口捨己「洛中洛外屏風の建築的研究」『畫論』第十八號, 2-40 頁, 1943 による。森蘊『庭ひとすじ』学生社, 121-122 頁, 1973 に「屏風絵とか衝立などに書かれた絵は, それほど写実的なものではないと思っていた私にとって, それらは庭園史研究の参考資料とはなりえても, 復元的考察に役立つとは考えても見なかった。それなのに昭和十八年堀口捨己博士は, 旧三条家, 上杉家所蔵の二種の『洛中

洛外屏風絵』から、応仁の乱などの戦禍からようやく復興した京都の公家や武家の住宅や町並みを復元し、内裏・足利將軍邸・細川管領邸の建物の輪郭や、池庭の形まで図示されるなど、建築史研究の資料としても一流のものであることを立証された」とある。

- 注 15 森蘊『室町時代（平安京）の湧泉と著名庭園』『寝殿造系庭園の立地的考察』奈良国立文化財研究所十周年記念学報第十三冊，84-85 頁，1962 による。あるいは、森蘊『庭ひとすじ』学生社，122 頁，1973 に、1967（昭和 42）年に神奈川県立博物館から依頼を受けて中世武家住宅模型をつくった際に、「洛中洛外屏風絵」の細川管領邸の復元的研究を企図したとしている。
- 注 16 森蘊『日本庭園史話』日本放送出版協会，4-8 頁，1981 において、「日本庭園史学をはじめた人たち」に続いて、外山英策，吉永義信，堀口捨己の 3 人の名前を挙げており、外山と吉永が農学部出身であるのに対して、堀口のみが建築家であり、さらに数寄屋建築研究者、茶道家、茶室研究者でもあると紹介している。
- 注 17 森蘊『日本の庭園』河原書店，45-52 頁，1950 において、江戸時代から大正・昭和初期を経て昭和期にかけての一般庶民の住宅の庭園についての記述が見られる。
- 注 18 森蘊『日本庭園史話』日本放送出版協会，8 頁，1981 に、堀口捨己について「昭和 40 年には長年の研究をまとめた『庭，空間構成の伝統』という大部な本を完成された。この本は文献的な面でもみごとであるが庭園を美しく作るという抜群の鋭い意識が作用しているので、その資料の扱い方にどこから見ても素晴らしいものが感ぜられる」とある。
- 注 19 藤島亥次郎『桂離宮』番町書房，124 頁，1945 に、「これは注目すべき重要事であるが、桂の御庭が極めて建築的であることである」とある。
- 注 20 森蘊 前掲書，30 頁，1973 に、藤島亥次郎について「昭和十九年に先生は『桂離宮』を執筆発刊されたので、私はその著述を通じ啓発されるところがあったことはいうまでもない」とある。
- 注 21 森蘊『日本の庭園』創元社，あとがき，1957 において、森はあとがきの副題を「将来の日本庭園をよいものにするために」としており、「私の庭園史研究は、歴史のための歴史研究であるより、これからの庭園意匠のありかたを考える参考資料の集収と、整理の役目だと思っている。そんなわけで、はじめは学者となることよりも設計家として立とうとした」とある。
- 注 22 森蘊『桂離宮』東都文化出版，242 頁，1965 に、堀口捨己の『桂離宮』について「堀口博士は、この本では年代論と作者論とを論文体で書いているが、意匠論は論文としてではなく、写真解説の体として記されている。博士の書院造、数寄屋造建築史についての造詣を傾けての解説には、傾聴に値するものが多い」とある。

【図版出典】

- 図 1 筆者撮影
- 図 2 筆者撮影
- 図 3 森蘊『日本の庭園』河原書店，32 頁，1950
- 図 4 森蘊，同上，50 頁，1950
- 図 5 筆者撮影
- 図 6 森蘊『美しい庭園—鑑賞と造庭—』創元社，141 頁，1950

- 図7 森蘊, 同上, 149 頁, 1950
図8 森蘊, 同上, 161 頁, 1950
図9 森蘊, 同上, 223 頁, 1950
図10 筆者撮影
図11 森蘊『日本の庭園』創元社, 口絵63, 1957
図12 森蘊, 同上, 実測図7, 1957
図13 筆者撮影
図14 森蘊『日本の庭』朝日新聞社, 106-107 頁間 実測図第8図, 1957

【引用文献】 ※引用に際し, 旧仮名遣いは現代仮名遣い, 旧字体は新字体に変更した。

- 1) マレス・エマニュエル編, 森有史, 栗野隆, 飛田範夫, 高橋知奈津, 田中栄治, マレス・エマニュエル著
『森蘊研究成果報告書 昭和の作庭記 -森蘊の業績と日本庭園史の作成』綴水社, iii頁, 2020
2) 森蘊『日本庭園の伝統』日本の美と教養(9), 一條書房, 3頁, 1944
3) 森蘊, 同上, 18頁, 1944年
4) 森蘊, 同上, 30頁, 1944年
5) 森蘊, 同上, 6頁, 1944年
6) 森蘊, 同上, 15頁, 1944年
7) 森蘊, 同上, 27頁, 1944年
8) 森蘊, 同上, 112頁, 1944年
9) 森蘊『日本の庭園』河原書店, 1頁, 1950年
10) 森蘊, 同上, 292頁, 1950年
11) 森蘊, 同上, 49-50頁, 1950年
12) 森蘊, 同上, 50頁, 1950年
13) 森蘊, 同上, 51-52頁, 1950年
14) 森蘊『美しい庭園 -鑑賞と造庭-』創元社, 1頁, 1950年
15) 森蘊, 同上, 1頁, 1950年
16) 森蘊, 同上, 1-2頁, 1950年
17) 森蘊, 同上, 18頁, 1950年
18) 森蘊, 同上, 136頁, 1950年
19) 森蘊, 同上, 139頁, 1950年
20) 森蘊, 同上, 142-143頁, 1950年
21) 森蘊, 同上, 143頁, 1950年
22) 森蘊, 同上, 148頁, 1950年
23) 森蘊, 同上, 149-150頁, 1950年
24) 森蘊, 同上, 151-152頁, 1950年
25) 森蘊, 同上, 155-158頁, 1950年
26) 森蘊, 同上, 158頁, 1950年

- 27) 森蘊, 同上, 163 頁, 1950 年
- 28) 森蘊『日本の庭園』創元社, はじめの言葉, 1957 年
- 29) 森蘊, 同上, はじめの言葉, 1957 年
- 30) 森蘊, 同上, あとがき, 1957 年
- 31) 森蘊, 同上, 97 頁, 1957 年
- 32) 森蘊, 同上, 97 頁, 1957 年
- 33) 森蘊, 同上, 132 頁, 1957 年
- 34) 森蘊『日本の庭』朝日新聞社, はじめの言葉, 1960 年
- 35) 森蘊, 同上, はじめの言葉, 1960 年
- 36) 森蘊, 同上, 10 頁, 1960 年
- 37) 森蘊, 同上, 10 頁, 1960 年
- 38) 森蘊, 同上, 26 頁, 1960 年
- 39) 森蘊, 同上, 39 頁, 1960 年
- 40) 森蘊, 同上, 45 頁, 1960 年
- 41) 森蘊, 同上, 52 頁, 1960 年
- 42) 森蘊, 同上, 55 頁, 1960 年
- 43) 森蘊, 同上, 129 頁, 1960 年

【参考文献】

- ・ 田村剛『実用主義の庭園』成美堂, 1919
- ・ 森蘊『桂離宮の研究』東京工業大学学位請求論文(博士論文), 1953, 昭和28年12月26日工学博士授与
- ・ 横井時冬『日本庭園発達史』創元社, 1940